慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シュムペーター著 東畑精一訳 経済分析の歴史I
Sub Title	
Author	山部, 徳雄
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1956
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.49, No.8 (1956. 8) ,p.597(47)- 601(51)
JaLC DOI	10.14991/001.19560801-0047
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19560801-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の資本を最大にするためには、後進國の特徴たる餘剰人口と低賃金は大きな障碍となる。これは潜在失業の形をとり極端な場合にはエクアドルの如くアメリカの十分の一の賃金と云う自由財に近いものとなる。これを救う一方法は勞働力を減らす條件を作り出すことである。これは立法によつて最低賃金を規定するか、政府が勞働力を直接に統制するか、國營產業で高い生產能率を目標とした管理を行うかである。近來の製油業では國際條約が障碍となつて居り、エヂプトの紡績業では土着の企業家の政策が障碍となつている。第二の障碍は熟練工の不足であるがロシアの工業化の經驗を見るとこの點が誇張され過ぎているとの感が深い。卽ち第一次五ヵ年計畫では工業勞働力は約二倍になつている。この訓練も長期の問題である。民主主義國における經濟發展は、工業化の始まつたばかりの國における方が、既に發展した國におけるよりも勞働の移動は大きい。更に後進國における方が畫一主義が強く、資源を投資するよりも、生活水準向上のために消費する危險が大きい。

以上が本論文の大要である。限界生產力均等法則が靜態的であり、勞働の生產性の高い產業を狙つて長期投資をなすべきだとする論旨には十分に傾聽に値するものがあり、更に各國の實情を詳細に調べた業績は敬服すべき點である。しかし、成長率の理論が完成されていないため、長期投資の問題と云つても產業構造の變化を具體的に示していないのが第一の缺點である。（これはウイーン學派の理論と結合すべきであろう。）第二に厚生經濟學と結合するとき、短期的には所得と消費が對應するとの前提をおいたわけであるが、考察の中心が長期の問題に移行しているので、厚生經濟學との結合

については更に考察を進める必要があると思われる。

註　先ず記號を左のように定める。

I…總投資　P…總附加價値　W…賃金支拂總額（實質額）

N…機械の數（P＝Np）　U…機械一臺當りの賃金費用

$$I=P-W=P-Eu\cdots\cdots(1)\qquad I=Np-Eu\cdots\cdots(2)$$

$$I=Np-eNu=N(p-eu)\cdots(3)\qquad C\Delta N=N(p-eu)\cdots(4)$$

$$\therefore\ \Delta N=\frac{N}{C}(p-eu),\ \Delta E=e\Delta N\ \text{より}$$

$$\frac{\Delta E}{e}=\frac{1}{C}N(p-eu)\cdots\cdots(5)\qquad \Delta E=\frac{e}{C}N(p-eu)\cdots\cdots(6)$$

$$\Delta E=\frac{1}{C}E(p-eu)\cdots\cdots(7)\qquad v=eu\ \text{を代入して}$$

$$\Delta E=\frac{1}{C}E(p-v)\cdots\cdots\cdots(8)$$

$$E_{t+1}=E_t+\Delta E_t=E_t\left(1+\frac{p-v}{C}\right),\quad \frac{E_{t+1}}{E_t}=1+\frac{p-v}{C}$$

$$E_t=E_1\cdot\frac{E_2}{E_1}\cdot\frac{E_3}{E_2}\cdots\cdots\frac{E_t}{E_{t-1}}=E_1\left(1+\frac{p-v}{C}\right)^t=E_1\left(1+\frac{p-eu}{C}\right)^t$$

を得る。

（鈴木　諒一）

シュムペーター著

東畑精一譯

『經濟分析の歷史 I』

本著は、シュムペーターが晩年の九ヵ年にわたつて書續けてきたものであり、全部を完成するに至らなかつたものである。その遺稿が、夫人の手によつて整理され、ここにシュムペーターの終生の努力の結實といわれる大著が完成された。

本著就中第一篇を讀んで痛感することは、シュムペーターの論理實證主義的科學觀に徹底していることである。近代社會科學は、ウェーバーの所謂「價値判斷の排除」という問題に對し、二つの方向を示している。その一つは、價値判斷を全く排除してゆく道であり、他の一つは、價値判斷を積極的に表示することによつてその問題を止揚してゆく道である。ウィーンの傳統をつぐシュムペーターが前者の道を歩んだことは當然である。經濟現象の中に實在する機能を把握することこれである。その場合、求められた法則の意義は、實踐とか豫言の指針の爲にあるのではなく、現象の認識の爲に便宜な手段を提供することにある。かくて科學の技術化の傾向が明確になつてくる。〃科學とは洗煉された常識〃であり〃道具化された知識〃である。この場合、よりよい法則とは、なるべく多くの經濟事象の解明に使用出來るものである。そして經濟學者の任務は、これらの技術を涵養することにある。かくて自然科學と社會科學との相違は方法的には殆ど存しない。法則に求められる普遍性と論理的精密性は、社會科學においても數理的自然科學の分析方法を重要ならしめるに至つた。しかしこのような社會科學の傾向も行きつく極點において價値判斷排除の困難性という問題に直面せざるを得なかつた。シュムペーターは、彼の所謂「ヴィジョン」というものが社會科學において如何に重要な役割を占めるかということを知つていた。その爲に本書「經濟分析の歷史」において、ヴィジョンの影響を如何にして除去するかに苦心した。除去というよりは、むしろ經濟分析とヴィジョンを峻別したといつた方が妥當である。シュムペーターは、〃科學の科學〃（認識用具の改善と統一）と〃科學の社會學〃（イデオロギー的要素を重視し、科學を一つの社會現象として考える）との兩極端の上にたつて「經濟分析の歷史」を究明していつた。卽ち、經濟現象を理解せんとする人間の努力が無限の連續のなかに如何にして分析裝置を作り出し改良し破壞していつたかという過程を分析した。更にこの場合注意しなければならないことは、實際に「分析の歷史」を展開してゆく場合、人間の思想の連續性という面を強く出していることである。「分析の歷史」は、思想の連續的展開の歷史であり、又一大學說史でもある。この點〃科學の社會學〃という彼の他の極面が躍動していることを見逃してはいけない。本書においても、シュムペーターの博學と旺盛な讀書力は、遺憾なく示されている。又その見解の多樣性と複雜性の故に、その內容を簡明にまとめることは困難である。

第一分册は、第一編　序論、第二編　發端から第一次古典的狀況に至るまで（七章の中第三章まで）からなつている。第一章「序論とプラン」においては、㈠本書のプラン　㈡何故經濟學の歷史を研

究するか　㈢しかし經濟學は一個の科學が　等について說明されている。シュムペーターは、まず「經濟分析の歷史」について定義をしている。經濟分析の歷史とは經濟現象を理解する爲に、人間が試みてきた知的努力の歷史を意味する。あるいは同じことに歸着するが經濟思想の分析的ないし科學的側面の歷史を意味する。では何故に、我々は、ここで〃ある一つの科學〃の歷史を研究するか。それは、次の三つの項目のもとに示すことが出來る。第一に教育的利益の爲である。最新の理論が如何に正確であり創造的であり嚴密であり、優美であつても方向と意味とにおいて缺けているという感覺が擴がることを到底防止しえない。その理論の歷史的背景を知ることが重要である。第二に、何がいかなる方法でいかなる理由でつづいて生起してくるか、について知ることと共に、天來の着想を引き出すことが出來る。第三に、その歷史の過程が、人間の心の動き方に關して多くのものを我々に敎えてくれる。歷史において具體的な論理、行動における論理、ヴィジョンや目標に植えつけられた論理が示される。以上の三つの理由による。「經濟學は一個の科學であるか」においては、科學という概念の檢討が行われる。科學は、この著作においては、必しも嚴密な科學を意味せず、廣い意味において定義される。卽ち、科學とは、つねに改良せんとする意識的な努力の對象となつているような種類の一切の知識である。更に科學とは道具化された知識であるとも述べられている。この場合、その知識のイデオロギー的要素の排除を行う爲、知識は、〃觀察又は實驗によつて證明される〃事が重要な條件となる。イデオロギーの問題はこの篇の第四章でくわしく檢討される。

第二章は、「間奏曲一」（經濟分析の技術）である。經濟分析は、三つの項目卽ち歷史統計理論に分類される分析技術から成立つている。ここで經濟史が最重要視せられる。その理由が三つあげられている。第一に經濟學の對象は、本質上歷史的時間における一つのユニークな過程である。第二に歷史的な記錄において經濟的事實と非經濟的事實（例えば制度的事實等）との相互關連の仕方を理解することが最もよくできる。第三に經濟學者の大多數の誤謬は、用具の缺陷よりも歷史的經驗の缺除に基く。シュムペーターの歷史の重視は、經濟學の對象が歷史的事實であるという點のみからでなく、歷史的センス、歷史的體驗のヴィジョンに對する關係更には經濟學と他の科學との關係の把握を重視したことにもよる。理論についての說明は、シュムペーターの分析に對する考え方を端的に示している。理論は、興味あると想像される調査研究の最終の結論を具現するもの（說明的假設）ではなくて興味ある結論を樹立する爲に作られた單なる道具や用具にすぎないとされる。從つてこの種の假定は、嚴格な論理においては、分析學者の恣意的な創造物に他ならない。その窮極において目的とするところは、現象を解明する一般法則の樹立である。以上歷史統計理論の三つの基本的分野を補足するに第四の基本的分野として經濟社會學を導入している。經濟社會構造とそこに生活する人間の行爲を究明する爲である。以上簡單に、經濟分析の技術についてのべた。しかしこれらの三つ又は四つの項目が一體どのような關係にあるかについての明確なる論理的證明は得られない。從來の彼の分析方法をみてきた場合、これらの四つのものの關係は、具體的に「分析の歷史」を展開する場合に示されると解するのが至當である。さて、ここでシュムペーターの「歷史性」の重視という點を再び取上げて檢討してみる必要がある。近代社會科學は、分化の一路を辿つた。そして又科學の傾向の一つとして「實證」とか「知識の技術化」という名の下に、精密論理による認識の體系を求めた。そこでは、科學は、法則という抽象的論理的フィクションの下にその具體性を喪失していつた。このような場合、「歷史性」を重視するということは、卽ち歷史が、その論理的體系に具體性とその體系のもつ意味を附與してくれること、又歷史が、分化した各科學部門の相互關連性とその綜合を具體的に示してくれることを意味する。問題は、それ丈にとどまらない。更に次の點を想起する必要がある。近代科學は、科學の對象から價値判斷を排除した。しかも社會現象を分析する場合、價値の問題が必然的に伴つてくるというパラドックスをもつ。價値判斷の問題は、不問に附して氣まぐれのままに放置されてよいか。シュムペーターは、この解決の場を歷史に求めたのである。歷史的センス、歷史的體驗の重視がそれである。そしてそれは又「科學の社會學」の重視にも通じてくる。しかし、果して歷史性の强調ということによつて價値判斷の問題が解決されるか。答は、一面イエスであり一面ノーである。又そのことは、科學の分化と綜合についてもいえる。

第三章「間奏曲二」（他の諸科學における同時代的發展）「分析の歷史」においては、各時代について經濟學に關聯をもつている他の諸科學就中ある種の科學の發展がお座なりでなく突込んで記錄されていることをのべると共に、㈠經濟學と社會學　㈡論理學と心理學　㈢經濟學と哲學の關連が說明されている。前二者は簡單に處理され重點は後者におかれている。經濟學と哲學との關係において、科學的業績が哲學からの影響をうけたとしてもそれ自體として獨立に存在することが强調される（この場合哲學とは、形而上學的信仰の體系のことを意味する）。

第四章　經濟學の社會學。「諸科學の科學」と「科學の社會學」という概念が定義される。これについては、先程から簡單にふれている。ついで㈠經濟學の歷史はイデオロギーの歷史であるかということについてのべられている。(a)經濟過程の歷史的「進化的」性質が既にイデオロギーの問題を含んでいる。又觀察者が一定の社會の產物であるということも、イデオロギーの重要性を物語る。これらのことは、構成せられる一般概念の範圍及これらの概念相互間の一般關係の範圍を制約する。(b)イデオロギー的偏見のマルクス的解明について論ぜられる。マルクスは、自分自身の體系に現われているイデオロギー的要素については盲目であつた。思想のイデオロギー的體系についてのマルクス主義的分析は、それらをやがて專ら經濟的な尺度だけで決定するような階級的利害という乳劑に還元する。イデオロギーが入つているという事實の言明は、必しも非難と誤謬の對象にはならない等々の批判がマルクス主義に對してなされる。そしてイデオロギー的偏見は、何人と雖も免かれることは出來ないとシュムペーターは、ここで斷論する。その場合カール・マンハイムの「不偏不黨の知性人」の存在という言葉を引用して、この種の知識人こそ多くの場合梗でも動かぬ確信によつて保たれている偏見の塊以外のなにものでもないと論じている。マンハイムについて、シュムペーターは、前述のことをいわんとして簡單にふれているだけ

であるが、いわれる程單純ではない。マンハイムは、イデオロギーの分析を徹底すると共に、近代科學の宿命を打破してゆく一つの方向を指示しそれを推進した。ついで(6)科學的過程。ヴィジョンならびに研究の手管を説明する。イデオロギー的要素は、一體どこに入りこむか。又これを排除しうる方法は何か。その爲には科學的過程そのものの分析に向わなければならない。まず分析に先立つ認知活動がなければならない。この分析以前の認知活動をヴィジョンと名づける。このヴィジョンは、定義の上から殆どイデオロギー的である。このヴィジョンによつて科學は、そのモデルを作る材料を與えられる。從つてイデオロギーの除去は困難である。以上第一篇の説明を終つたわけであるが、之を單なる第二編以下の準備段階であると考えてはいけない。そこには、シュムペーターの社會科學に對する見解が展開されている。

第二編發端から第一章ギリシヤ＝ローマの經濟、ギリシヤのプラトン、アリストテレスの二人が主として論じられている。ついで古代ローマの狀態が説明される。第二章のスコラ學者と自然法の哲學者では、歴史の連續性という點が强調されているしかも徹底的である。封建的經濟世界から資本主義的經濟世界に轉形しうるためには、人々が全く新しい事物の考え方を抱かねばならなかつた筈であるという意味での資本主義の新精神なるものは存在しなかつた。封建時代の社會には、資本主義時代のあらゆる萠芽が含まれていた。これらの萠芽は緩慢な速度で發育し、その各々のステップはそれに應ずる方途を敎えつつ、資本主義的「精神」とを少しばかりずつ濃厚にしていつた。十五世紀の末には、今日われわれが資本主義なる漠然たる言葉に結びつける慣わしとなつている現象の大部分が出現した。その資本主義的企業の生成は事業所における仕事から生ずる新らしい精神慣行を生ぜしめた。そしてこの種の考え方が漸次あらゆる分野に浸透した。この結果のなかで最も重要なものの一つは、敎會外の知識人の出現從つてまた敎會外の科學の出現であつた。敎會は、之等の人々の存在自體に對して反對する理由はなかつたし或る種の人々に對しては、寛大なパトロンでもあつた。敎會自身古典の研究を奬勵した。スコラ哲學も敎會外科學のあらゆる萠芽を包含していた。十六・七世紀の敎會外の學者は、スコラ哲學の仕事を破壞するよりむしろ繼續したのである。以上の敍述によつてもわかるように誠に明るい中世である。ルネッサンス、宗敎改革の意義はどういうことになるか。歴史の連續とはこのような一本線であることを果して意味するか。「自然法の概念」は、誠に興味ある課題である。しかしシュムペーターの敍述は明確を缺いている。アリストテレス—古代ローマの人々例えばガイウス、ウルピアヌス、キケロー聖トマスーモリーナと一應自然法の系譜とその性格の變遷はのべている。そして「自然法と社會學的合理主義」という問題が論じられている。自然法の考え方は、後世の科學に大きな影響を與えている。しかし中世の自然法と近世の自然法更には現代における自然法の解釋は、異るものである。この點の相違就中神の侍女である理性と人權の確立とか個人主義の場合における理性との相違とその變遷の過程はどのようなものであつたか。思うに、シュムペーターは、「分析の歴史」において、ユートピー的要素をなるべく排除しようと努力したのではないか。實踐が理論より先であるということは、被創造者という人間存在そのものの根本的な辨證法的な構造からくる。しかしそのことは、身が心より先であるとか精神から離れて、肉體を考察することではない。自然法が連續的に發展する爲には、新しい意味が內から與えられなければならない。あたかも古い革袋の中に新らしい酒が盛られるように。第三章は、行政顧問官と時事問題小册子について述べられている。重商主義の時代である。（原書は、Joseph A. Schumpeter, "History of Economic Analysis", edited from Manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter, New York, Oxford University Press, 1954, pp. XXV+1260 である。）（A5判、四三八頁、七五〇圓、岩波書店）

（山部　德雄）

アブッシュ著
道家忠道・成瀨治譯

『ドイツ——歴史の反省——』

「日獨兩國民が戰わなければ、
世界戰爭はおこらない」

一

ナチス・ドイツがついえ去つてから十年、われわれは再び新しいファシズムの脅威を身じかに感じようとしている。世界史にも稀なあのいたましい體驗にもかかわらず、われわれの世界は軍備擴張を一刻もやめようとはせず、水爆戰爭の危險は去つたとはいえない。とりわけ、祖國日本はドイツと同じく、世界が平和の方向に向うか、それとも再び戰爭に轉落するかの岐れ路に立つて、その鍵をにぎつているように見える。これが、われわれにとつてさけることのできない現實である以上、われわれが、そのおかれた世界史的な地位について深く省察することはもちろん必要であるし、とりわけ再びあの悲劇をくり返さないためにも、われわれの悲劇の原因が、何に由來するものであるかを、深刻に考えることは、一層必要であろう。最近における日本近代史の研究が、いちじるしい進歩を記錄したのも、現在の日本がおかれている複雜微妙な立場、ともすれば運命的なものとして觀念しがちなこのゆううつな狀態——いうまでもなく植民地的從屬と政治の腐敗墮落——を歴史の流れのなかにしつかりと把握し、どうしたらこの狀態から脫却することができるかという切實な要求が、廣く國民大衆のなかからわき上つてきた結果にほかならない。

二つの世界に分割され、日本の場合よりも一層深刻で悲慘だつたドイツでも、近代史研究への氣運が非常にたかまつていると考えられる。たとえば、寡聞な筆者の眼にふれたものでは、例のクチンスキーのドイツ帝國主義にかんする大著（Jürgen Kuczynski; Studien zur Geschichte des Deutschen Imperialismus. 2 Bde. 1949.）やドイツの經濟的發展にかんする勞作（Die Bewegung der deutschen Wirtschaft von 1800 bis 1946, zweite durchgesehene und erweiterte Auflage, 1948.）、そして更にルードウィッヒ・